

## 偽の鍵

### 第3編4章

スコラの詭弁家たちの悔い改め(告解と償い)についての主張は福音の純粹性からどんなに遠く離れているか



私たちの罪を赦すのは神が無代価で与えてくださる恵みなのです(詩52:3;ローマ3:24、25、5:8;コロサイ2:13、14;テトス3:5)。その価は私たちに代わってキリストが完全に支払ってくださったためです(使徒10:43;コリント第二5:19)。キリストだけが神の子羊であり、私たちの身代わりとなられ、その罪を償うことができる唯一の献げ物、和睦の献げ物となられたのです。

鍵と錠前は人間の作り出した素晴らしい発明品の一つと呼べるでしょう。最近はいろいろな種類の鍵が登場するようになりました。カード・キーはもちろんのこと人間の指紋や、その人の目の瞳で本人を判断して扉を開けたり、声を認識するようになっている鍵もあります。ところで、天国にも鍵があります。キリストはこの鍵を教会に委ねられました(マタイ16:19、18:18)。しかし、ローマカトリック教会は昔から自分たちで作った偽物の鍵をつかって、信徒たちを苦しめています。

第1節 悔い改めに関するスコラ学者たちの教理は人の良心に平安を与えることができない。

悔い改めについての教理は大変に重要です。悔い改めと罪の赦しは福音のすべてとも言えるからです。そこでこの知識にはわずかな過ちも許されず、正確でなければなりません。もし、悔い改めについての知識が正確でなければ、私たちの良心は混乱を続け、常に不安の中にとどまり、神との平和を得ることができないばかりか、むしろ恐れを抱きながら神の前から逃げ出すことになってしまいます。

数百年に渡って(8世紀から17世紀、特に13世紀のトマス・アキナスの時代に全盛期を迎えた)カトリックに影響を与え続けたスコラの詭弁家たちは悔い改めについてとんでもない鍵を作り出しました。彼らは悔い改めを次のように区分したのです。第一は魂が行う痛悔、第二は口で行う告解、そして第三に行いである償いというものです。

## 第2節 誰も完全な痛悔について確信を得ることはできない。

彼らの三重の概念を一つ一つ考えてみましょう。まず痛悔です。通悔は赦しを受けるための第一歩として十分で、完全で、正しい痛悔でなければならないと彼らは言うのです。もちろん神の御心になかった悲しみは悔い改めのために益があると聖書も語っています（コリント二 7：10）。しかし、私たちの中の誰がたった一回でも完全な痛悔をすることができたと自信を持って言えるでしょうか？

スコラ神学者たちはこのような不可能な要求を人びとに求めているのです。たぶん彼らの言葉を信じようとする者はもがき苦しみながら結局は後悔することになるでしょう。誰であっても私たちの良心に完璧な平和を受けることができなくなるからです。罪人は自分の行い（痛悔と涙）を通しては赦されることはできませんし、ただ父なる神の慈しみとキリストの功によってだけ赦されることができるのです。ですから伝道者の使命は重荷を負って苦しんでいる者の目をキリストに向けさせることにあるのです（ルカ 4：18；マタイ 11：28）。

## 第3節 告解の教理は聖書から何の根拠も得ていないし、実際に不可能なことである。

次に告白（告解）について考えてみましょう。この告白の問題はスコラ学者たちと教会法学者たちとの間で論争的になったものの一つです。それが神の教えからでたものなのか、教会の法から始められたものなのかと言う論争です。スコラ学者たちは聖書からいくつかの例を取り上げて声高に叫んでいます。一つは主がらい病患者を癒された事件です（マタイ 8：4；マルコ 1：44）。寓喩的解釈ですが、祭司たちは霊的ならい病患者の告白を聞くために任命されていると言うのです。

これは荒唐無稽な解釈です。いつレビ人の祭司たちは信者の告白を聞かなければならないという任務を受けて任命されたのでしょうか（申 17：8、9）。さらに、（旧約の）祭司たちの職務はすべてキリストによって完全に成就されたのではないのでしょうか（ヘブライ 7：12）。また彼らはラザロの事件を例に取り上げながら、イエスが墓からラザロに「出てくるように」とお命じられたときに彼の顔を包んでいた覆いを「ほどいてあげなさい」と言われたことを取り上げて霊的覆いをほどくことが祭司たちに任されていると言うのです（ヨハネ 11：44）。

その上で彼らは洗礼者ヨハネの場合を例にあげています。人びとがヨハネの元にやってきて罪を告白したように、信者は司祭たちのところにやって来て自分の罪を告白しなければならないと言うのです。しかし、これは洗礼を受けるための告白でした。また彼らはヤコブの教えを例にあげています。「罪を告白し合いなさい」（ヤコブ 5：16）とされているところがそれです。確かに（信者は）罪を互いに告白し合わなければなりません。そしてその言葉は「互いのために祈り合いなさい」と言う言葉で閉じられているのです。罪を互いに告白し、互いのために祈らなければならないと教えているのです。やはり、この言葉は（信者が一方的に司祭に自分の罪を告白する）告解の儀式とは全く違ったことについて語っていることが分かります。

彼らの記録を見ても告解の儀式が確定されたのはインノセント3世（1198～1216年）の時代になってからのことであることが分かります（ラテラノ会議 1215年）。それならばその時代の前には誰も罪の赦しを受けた人がいないことになってしまうと言うのでしょうか。5世紀ごろの人物ソゾメノス（Sozomenos）の文章を見ると、当時の監督たちが定めたこの儀式を西方教会、特にローマ教会だけが熱心に守っていたと伝えています。当時、尊敬されていた監督ネクタリウス

(Nectarius)はある不道德な事件をきっかけに告解の制度を中止させています。また、やはりコンスタンチノプールの教会の監督であったクリソストモスは(罪の告白は神に対して行うものであり)人に対して行う告白には反対であると語っています。

「あなたの良心を神に聞いていただくために出て行きなさい。最も優れた医者である主にあなたの傷をお見せして、その方から薬を受け取ることにはしましょう。人に告白するものではありません。」

人びとを欺く者たちは詩編(7:17)に出る「賛美せよ」という言葉を「告白」せよという言葉に言い換えて翻訳しています(ブルガタ訳)。

しかし、聖書がこの問題について教えていることはただ一つだけです。それは私たちの罪をキリストに告白しなさいと言うことです(ヘブライ4:12;詩編32:5;ヨハネ第一1:9)。そしてこのように主に自分の罪を真実に告白することを知らず、他の人にも自分の罪を告白することができるというのです。私たちが自分の罪を告白することで他の人びとと全世界の前で神の慈しみを明らかに示すことは非常に望ましいことであると言えるからです(サムエル下12:13;レビ16:21)。

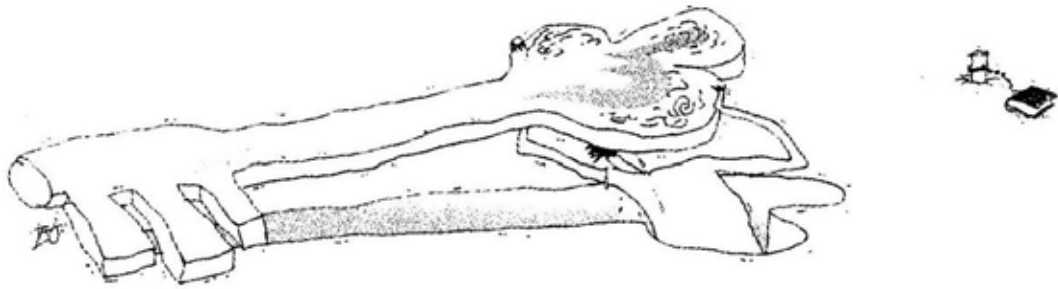
また全会衆が一緒に同じ罪を犯したときにも共に告白したことがあります(ネヘミヤ1:7,9:1,2)。天然痘や災害が襲ってきたときに全教会が共に悔い改め、罪を告白することは相応しいことでしょう。また、主日ごとに牧師が自分と教会員たちの罪を指摘し、主の赦しを求めさせることも会衆の祈りの扉を開くよき鍵となるでしょう。

そして聖書は次のような二種類の個人的な告白を認めています。一つは私たち自身のためのもの、もう一つは隣人のためのものです。自分のためのものとは互いに自分の罪を告白し合う場合です(ヤコブ5:16)。このとき信徒たちは牧師に自分の罪を告白し、牧師は聖書のみ言葉を伝え、赦しについての確信を持たせるようにし、慰めを与えることができます。

信徒すべてが互いにそのようにすることも可能ですが、牧師はその使命のために特別な任務を受けていると言えるのです。このとき牧師は聖書に根拠のない一切の「くびき」を信徒の良心に与えてそれを束縛してはなりません。完全な告白を強要してもいけませんし、また、すべての人にそのようにすることを求めてもいけななのです。牧師はむしろ人びとに罪を赦す福音の約束を証言しなければなりません。

一方、隣人のための告白は傲慢を取り去るためのものです(マタイ5:23,24)。隣人に犯した罪を告白して、許しを受けることで失われていた愛が回復します。教会全体に害を及ぼした人びとがその罪を告白することもこれと同じものと言えるでしょう。キプリアヌスの証言にあるように初代教会の告白の形式はそのようなものでした。

さらに実際に考えてみても完全な告白は人間には不可能です。自分の罪を一つも漏れることなく完全に告白できる人はどこにいますか。それはダビデも放棄せざるを得なかったことでした(詩19:4,38:4,18:5,69:2,3,15,16)。不可能なはずの完全な告白をせよと薦めるものたち処刑人のような者たちと言えるのです。彼らは私たちを絶望に陥れるか、真実な悔い改めを知らない偽善者にさせるだけなのです。また、一年に一、二度だけ司祭のところに行ってゴミ箱をひっくりかえすようにして思い出した自分の罪を告白するなら、その人は再び始まる一年の間に大胆に罪を犯すことができるというのでしょうか。



#### 第4節 教会が受けた鍵は告解制度と全く関係がない。

キリストは確かに教会に天国の鍵を委ねてくださいました。聖書の二つの箇所です。最初のみ言葉は福音伝道についてです（マタイ 16：19）。弟子たちが伝える福音を聞いてそれを信じれば、罪が赦され、救いを受けることができますが、それを信じなければ裁きを受けると言うみ言葉です。二番目のみ言葉は教会の戒規（破門）についてのものです（マタイ 18：15～18、参照、ヨハネ 20：23）。やはり彼らの主張するいかかわしい告解制度とは何の関係もないものです。これは教会に対する明らかな妨害を取り去るためと、教会の秩序を回復させるために行われる戒規についての教えなのです。

ところが狡猾に虚言を作り出す者たちは教えを儀式に変えるところで生まれつきの才能を發揮しています。そして彼らはそのような聖書のみ言葉によって告解を拡大解釈して制度にしてしまいました。「相応しい年齢に達したすべての信者は誰であっても少なくとも年に一度は自分の罪を司祭に告解しなければならない」、「告解の誓願が心に固く抱かれるのでなければ罪は赦されない」、「告解の機会が与えられたのにこれを無視するならば、パラダイスの門は閉ざされる」と。

神は人の良心を人間の手から解放して、み言葉に結びつけられたのに、これらの虚言を語る者たちはその反対のことをしようとしているのです。司祭たちは罪人の告白を聞いて、「区別する権威」の鍵と「実施する権威」の鍵が持っていると言うのです。しかし、もし本当に司祭たちの手にそのような権威が与えられているとしたら、それはどんなに不安なことでしょうか。いったい司祭は何を基準に人を天国につなぐと言うのでしょうか。神のみ言葉を相談役程度にしか考えていない者は結局、罪を告白する者の功労と真实性に依存して、その鍵の機能が左右されてしまうのではないのでしょうか。それはあまりにも不確かなことになり、あまりにも不安なこととなってしまいます。

#### 第5節 キリストは完全な償いを提供している。

彼らは今度は新たな赦しの方法を追加します。それが罰と償いという制度です。私たちが罪を告白すれば、神の慈しみに従って罪責は赦されますが、神の義の掟に従ってその罰を受けなければならない、そこでは涙（痛悔）や断食、献げ物や自らの肉体を傷つける行為などの業が求められるというのです。結局、自分の行う業（功労）によって神の義に対する償いをするということになると言うのです。これはどんなに欺瞞に満ちた暴言でしょうか。

私たちの罪を赦すのは神が無代償で与えてくださる恵みなのです（詩 52：3；ローマ 3：24、25、5：8；コロサイ 2：13、14；テトス 3：5）。その価は私たちに代わってキリストが完全に支払ってくださったためです（使徒 10：43；コリント第二 5：19）。キリストだけが神の子羊であ

り、私たちの身代わりとなられ、その罪を償うことができる唯一の献げ物、和睦の献げ物とされたのです。誠に愚かな者たちはキリストのその恵みを最初、洗礼を受けた時だけに効果があるものであって、その次からはその血が教会の鍵を通じて分け与えられなければならないと主張するのです。そのような言葉はいったい聖書のどこに書いてあるのでしょうか。むしろ聖書は私たちにただお一人の方である永遠なる大祭司がおられると証言しているのです（ヘブライ 4：14～16；ヨハネ第一 1：1, 2）。

その幼稚な者たちはダビデの例をあげて罪については必ず代価を支払わなければならないと主張します。そして教会はその代価を判断し、決定して、宣告する権能を受けていると言うのです。しかし、聖書には赦される者の罪についてはどのような罰も加えられていないことを示しています（ルカ 22：61；マタイ 9：2）。神が私たちの罪を赦されることを表現した文章を見てみましょう。私たちの罪をすべて忘れてくださると言ってくださっています（エゼキエル 18：21, 22；イザヤ 38：17、ミカ 7：19、ヨブ 14：17）。覚えていない罪を罰することができるのでしょうか。そしてキリストが支払った代価が私たちの受ける罰のためのものでないとしたら、それは何のためのものになるのでしょうか。

旧約時代に罪を償うためのどのような行為があったのでしょうか、ただ贖罪の献げ物だけが要求された理由は何であったのでしょうか。それは私たちにキリストだけが唯一で十分な償いの献げ物とされたことを意味している（ペトロ第一 2：24；イザヤ 53：5；ローマ 3：24）のではないのでしょうか。そしてダビデが受けた罰は遺棄された者たちに向けられる報復の罰ではなく、子供たちに与えられた戒めとしての罰なのです（サムエル下 7：14）。刑罰ではなく教育のためなのです（ヨブ 5：17；詩 89：30～33、ヘブライ 12：5, 6）。

#### まとめの言葉

スコラの傲慢で愚かな学者たちが頼りにしてきた師はロンバルドゥスです。古代の教父たちの文章を集大成した本（命題集）を 12 世紀初頭に公刊しました。しかし、彼が編集した教父たちの文章は大部分がその出所が怪しいものなのです。アウグスチヌスの名前になっている悔い改めについての内容も同様で、つぎはぎだらけの引用をしてアウグスチヌスの名前はついていても彼の言葉とすることができないしろものになっているのです。スコラ学者のおしゃべりたちは悔い改めについて一生懸命になって鍵を作り出しましたがそれで数多くの魂を苦しみに陥れているのです。